

## 雲助 (花の雲助合肩)

へ水の流れと人の身は 果てはどうなる事ぢややら どうとも斯うとも  
今更に 愚痴はいやんな気樂がましよ いとし可愛にそやされて  
へかゝつた恋の取持に 蠅ぢやなけれど雲助と 落ちても雲の名は  
脱けぬ 世は逆様ないとなみも へ昔や金持地面持 今は分持ちと  
んぼ持 餅ぢや恐れる酒なら来なせ へ酔へばナア酔ふ程ナア長持  
や軽い ヤットコ道心仏の性かえなんのこつたえ へ女で男の豆いりは  
あられもないぢやないかいな へ直ぐな街道横に行く へませこそ節  
でやりやんしょう へ上り夜船に櫂や艚ぢやとて揖を取つたえ 佐田  
や牧方淀水に 車がぐる／＼と伏見へ着くエ へオノイ 親父どの其金  
こつちへ貸してくれ へ与一兵衛吃驚仰天しいエ／＼金ではござりま  
せん へ娘化粧すりや狐がのぞく へ賽の河原の地藏尊 へ一とつと  
やア一と夜明くれば賑やかで 賑やかで飾り立てたる へ松一と木変  
らぬ へ色の世界に色なき者は へわしとかきさんと糸取つて 居たら  
トノ事いの へ東上総の夷隅の郡 村の小名をば金 へ沖に見ゆるは  
肥後様のエソレソレ／＼船よ紋は九ツ九耀の星 へ蝶々留まれや菜  
の葉がいやなら葭の先へ 留まらんせ へ泊る宿々部屋々々の身の上  
話もおかしかる へ是でもわつちは流れの身 のぼり詰めたる山形に  
星のニツもついたもの 味噌揚巻ぢやなければども へ月ぢや花ぢやに  
うか／＼と驕りつくした間夫狂ひ へそれから末は並長家一畳半も  
玉の床 へ来るたびたびに貸せ／＼と 金の成る木は持つまいし まし  
て勤めの身ぢやものを へその勤めより氣の重いそも自らは雲井の上の  
宮仕へ へ三十一文字がかけ橋の 恋故位をずる／＼と 天から滑  
り落ちの人 多くの恋の歌所でも烏丸ではないかいな へわしは越後の  
後家の子で 浜も田畑も沢山にその仕草さへ手にやつかぬ へかの獅子  
舞の角兵衛どんに打込んで これが野中の一本杉を へ主と思うて  
抱きついて 顔も体も脂だらけ へ陀羅尼千巻よみし身も 熊野へ出  
たが墜落の始め 丸太船ぢやと名に立てられて へちと癩癩もつむり  
にめで、 仏のみ手の縁の綱 初めて往生吃驚比丘尼の成れの果 へ  
宗旨違イの神の告げ 千早振びし恋話 へ京の大原の梓巫女 湯立  
の時に負はれた男ツイ悪戯が 評判の名さへ高天ヶ原の中 たゞでは  
ないとなぶられて とう／＼とうかみ縁でこそ へこゝに集る野良仲間  
手柄ものではないかいな これも気散じ酒機嫌 へ吉野の山を雪か  
と見れば 雪ぢやござらぬナア是の花の吹雪でござるよ へこのエ  
うぬはなぜ見えぬか 午の刻だにサツサ何んの氣の迷ひだ へ立田の  
川を錦と見れば 錦ぢやござらぬナア是の紅葉のしがらみで へごん

ごぎるよこれの工うぬは何故見えぬか 午の刻だにサツサなんの気の迷  
ひだ へ酒に浮かるゝ浮き拍子面白や へ実に全盛の花遊び 賑は  
しかりける次第なり 賑はしかりける次第なり。